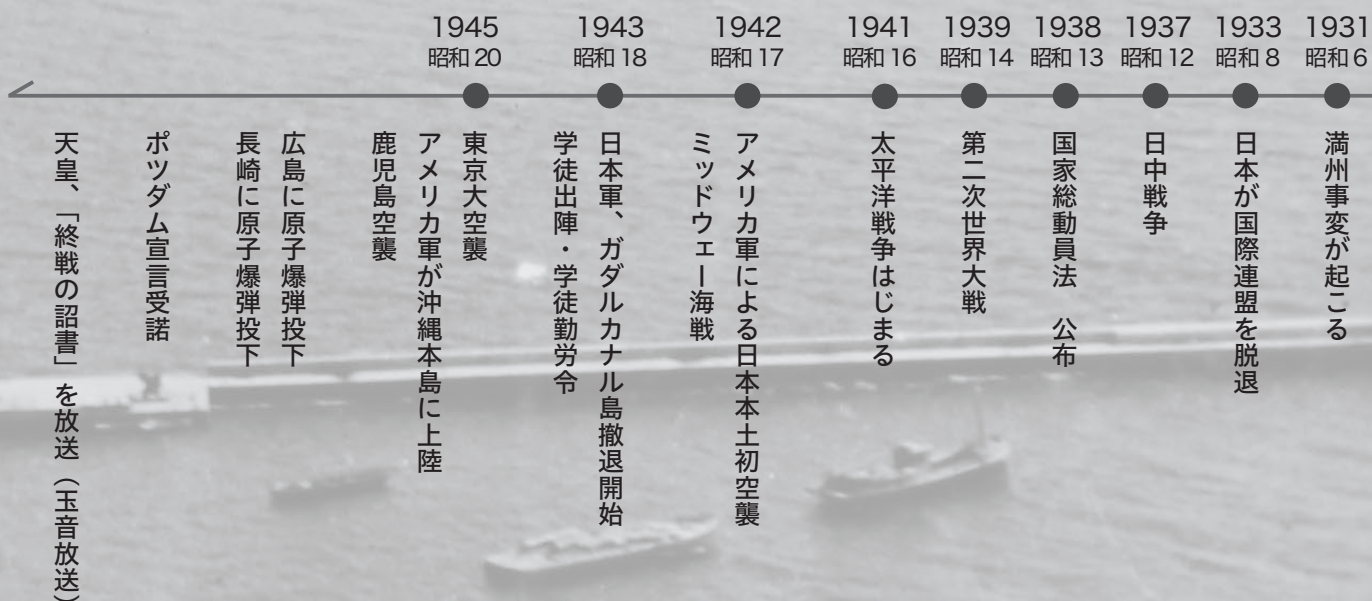


戦後 80 年

後世に語り継ぐ

私の戦争の記憶と 平和への願い

終戦までの歩み



太平洋戦争が始まり、国民生活が日増しに苦しくなっていく中、錦江町（旧大根占町）でも、昭和 17 年 6 月 30 日、全町民に向け「食糧自給自足策ニ付御奮起ヲ願フ」と題した通達が出されました。

私などは日本の農民であり、食糧生産の第一線士であります。決して統後の国民という感じはいたしません。志那事変の処理も大東亜戦争の終結も、北辺の護りも、私などの精神力との如何に依り左右せらるることは論をまたない処であります。我町に於ける食糧事情は御承知の通りであります。農家は宜しく米、麦、甘藷等、主要農産物を自分の力で作り出し、自給自足の策を立て、尚進んで国家国民を養う心構えを有す。よく反対に米の配給を他に仰ぐが如きは、農家の一大恥辱と考えねばなりません。色々事情もあり理屈もありませうが、一切をかなぐり捨てて、一意専心食糧農産物を作付けして下さい。一反の米も君に忠一畝の甘藷も国民の務め。一株の野菜も東洋平和の為だと思へば、苦しくもなければ難儀でもありません。何卒今一段の御奮起を御願致します。

（大根占町誌より抜粋）

私たちが暮らす錦江町も、戦争一色に染められた時代を経て、今があります。戦後 80 年が経った今、当時の暮らしを知る世代は少なくなり、子どもたちにとって「戦争は遠い昔の話」なのかもしれません。

今回は、当時を生き抜いた方々に貴重なお話を伺いました。

死と隣り合わせの毎日
「戦争はせんほうがいい」

海軍に入隊
厳しかった新兵訓練

私は、青年学校二年のとき、「お国のために戦いたい」と志願して入隊しました。配属先は、佐世保の第一海兵団。入隊したのは17歳でした。周りは同世代がほとんどでしたが、なかには高等2年（14歳）の子もいました。新兵の訓練で、山の中を二日間何も食わずに歩き続けていたとき、その子が急に泣き出しました。体格は小さく、5 kgの鉄砲と背のうを背負って、きつかったんだと思います。私はその子の鉄砲を持ち、坂道では背中を押してあげました。「なんで兵隊になったのか？」と尋ねると、「戦うために志願してきた」と泣きながら答えた彼の顔が忘れられません。

訓練の途中で、千葉県館山にある
学校で3か月間学び、その後、佐世
保に戻り、寄船砲台（現在は西海市）
に配属。丘の上に大砲が2つ並び、
海からの攻撃に備えていました。

目の前で死んでいった仲間

ある日、アメリカ軍のグラマン（戦闘機）二機が海の方から低空飛

自分は運良く生き延びただけ
いつ死んでもおかしくなかった

15歳で入隊 電信兵へ

高等科2年で入隊試験を受け、翌年5月に山口県にある防府海軍通信学校に入隊しました。15歳でした。同期は150人いて、成績順にクラス分け。私は上位のクラスだったので、半年で卒業することができました。学校では、電信兵になるための訓練を受け、モールス信号などの伝達手段を学びました。モールス信号は、「イは「伊藤」、ロは「路上歩行」、ハは「ハーモニカ」のように、語呂合わせで覚えます。私は手が小さかったから、電信兵として有利でした。

卒業前に、大分県で演習がありそこに母が面会に来てくれました。10分ほどしか会えませんでした。凍傷で骨が出た私の手を見て、母は泣いていました。

帰らぬ仲間
明日は自分の番

卒業後は、鹿屋航空基地へ赴任することが決まっていたが、赴任直前に、急きよ佐世保通信隊へ変更となりました。ちょうどその頃、沖

行でやってきて、私たちの砲台めがけて「バババババ」と機銃掃射。目の前で仲間8人が死にました。どうにか助けたかったのですが、中隊長から「中俣、お前は早く防空壕へ入れ」と言われ、そうするしかなかった。撃たれた後、少し意識があった隊員は「お母さーん」と4、5回言って死んでいきました。

また、ある時、新兵時代に仲良くしていた隊員が、日の丸のハチマキを巻いて、私の前に現れました。私が、「ハチマキどん巻いて、どげんしたとか？」と尋ねると、彼は「10日後に、魚雷艇で敵艦に突っ込む」と。そう言うとき、私を抱きしめ、泣き出しました。私も彼と一緒に泣き

A map of the Sea of Japan (日本海) showing the Korean Peninsula to the west and the Japanese archipelago to the east. A yellow dot on the Korean coast is labeled '佐世保' (Sasebo). A black dot on the Japanese coast, near the island of Kyushu, is labeled '寄船' (Kure). A line connects these two points across the sea. The map is in grayscale with yellow text and markers.

ました。その後の彼の消息はわかっていません。

8月9日の出来事

いつものように、装填台に立っていると、稲光のような、これまで経験したことのない光がピカッと辺り一面を照らしました。昭和20年8月9日、長崎に原子爆弾が落とされた日のことです。3日前に広島に原爆が落とされたことは中隊長へ伝わっていたので、「もしかしたら、長崎に原爆が落ちたのかもしれない」とみんなで話しました。

そして、**終戦**――

8月15日、終戦。日本は負けたのだと知らされ、泣きました。悔しかった。勝つことだけを考えて、これまで過ごしてきたので。「いかにやったね」としか思えなかった。

それから、大砲の解体を命じられ、鹿児島に戻ったのは、9月5日のこと。汽車で鹿児島市に着いたけれど、空襲で焼け野になっていて、どこが何かわからない状態でした。そこから、志布志、高須までは汽車で。高須からは歩いて、皆倉の



皆倉自治会
中俣 道夫さん（98歳）

ようやく家にたどり着いて、戸を開けると、誰もいません。近くに住んでいるおじさんから、まだ家族は3里先へ避難していると聞き、行ってみると、母や弟、妹、叔父たちがいて、私を見て、不思議そうにしています。家族は終戦したことを知らなかったのです。「戦争は終わったたつど」私が言うのと、みんな驚いていました。

「戦争はせんほうがいい——」この言葉は、日清・日露戦争に行った私の祖父が、ずっと口にしていた言葉。私も戦争を経験し、心からそう思います。

戦後80年。「もへ(もう)80年たったけ」と思う。これまでの人生で、兵隊より大変だったことはない。戦争なんて、せんほうがいい。

はないかと心底思いました。

昭和20年、大晦日の晩。ようやく田代に帰郷できました。私の姿を見て、母はさぞ驚いたことでしょう。生きていることを伝える手段がなかったので、母は自分がもう死んでしまったと思っていたはず
です。

あわから80年。戦後も交流があった仲間たちが、年々減っていく。もう戦争はすつといかん（するといけない）。軍人だけじゃなく、みんなはじめにあう（ひどい目に遭う）。

▼防府海軍通信学校 同じクラスの仲間たち



撃沈　アメリカのロッキードに攻撃されました。一瞬の出来事でした。私が乗った警備船だけは攻撃されずに無事でしたが、沈んでいく貨物船と、海面に浮かぶ動かなくなった仲間たちの光景は、今も忘れられません。

捕虜収容所での過酷な労働

終戦後は、捕虜収容所に入れられ、労働の日々。

「撃ち殺されるのでは」
という不安を抱えなが
ら、食べるものもなく、
骨と皮だけになりました。現地住
民から衣服をはぎ取られたり、叩
かれたり。このまま帰れないので



鶴園自治会
たかし
久保 卓さん (96歳)

私の戦争の記憶と平和への願い

勤労奉仕、入院、そして爆撃

私は戦争には行っていません。申良の細山田にある農場に働きに出ていました。勤労奉仕です。田代からは9人で行きました。今みたいに車やバスは走っていませんから、9人の友達と引率の先生とで、細山田まで歩いていきました。

当時、米なんて全くなくて、主食はカライモ。農場で作っていた米はすべて軍に送っていたのでしよう。

農作業中、私は体を壊してしまって、鹿屋の北田にある海軍病院に入院することになりました。ちょうどその頃は戦況が厳しく、鹿屋の街も空襲の被害を受けていました。私の病院も爆撃に遭い、多くの命が失われました。私はたまたま壕の中にいて助かりました。私の付き添いで来ていた同郷の友人は爆風で川に飛ばされましたが、奇跡的に一命を取りとめました。

終戦してからのこと

それからしばらくして、終戦の日を迎えました。その日は、病院に人がほとんどおらず、どうしたことかと思っていました。「どうしてこんなに人がいないのか」と看護師に尋ねると「戦争が終わったようだ、日本は負けた」と。びっくりしました。



鶴岡自治会
水田 五三さん (94歳)

それから、農場の人が用意してくれた馬車で、病院から大根占まで帰りました。大根占から鶴岡までは徒歩。鶴岡まで来ると、近所のおじさんが畑仕事をしていて、私の姿を見るなり、大変喜んで出迎えてくれたことを覚えています。

戦時中、花ノ木にアメリカ軍機が墜落し、鶴岡の人たちはこぞって見に行つたそうです。パイロットはすでに死亡していましたが、アメリカ軍への憎しみから、棒で攻撃しようとした人も、なかにはいたようです。私の病院に付き添い、爆風に飛ばされたながらも一命を取りとめた友人とは、もう80年以上の付き合い。一緒に出掛けたり、家でお茶を飲んだり、晩年も楽しく過ごしていました。最近、彼が施設に入所し、随分寂しくなりました。苦しい時代を共に過ごした彼との日々は一生忘れません。

戦時中の暮らし

私は神川新町で生まれ育ち、神川国民学校を卒業後、大根占青年学校で二年間学びました。学校では、なごなたの稽古もしました。

とにかく、食糧難。食べるものが本当になかった。配給では全然足りなくて、カライモやら麦やら植えて、それを家族で食べていました。衣服も「切符制」。一人が購入できる数が厳しく決められていました。

家が海岸の近くだったので、攻撃された飛行機が錦江湾に落ちていくのを何度も見ました。当時は、友人と「敵機が落ちた」と手を叩いて喜びましたが、落ちたのはアメリカ軍機ではなく、ほとんどが日本軍のものでしたように思います。

機銃攻撃を受けた精米所

戦時中、怖い思いをしたのは一度だけ。神川の精米所に手伝いに行っていたとき、上空からアメリカ軍機が機銃攻撃してきました。とっさに私は米の中に身を隠し、事なきを得ました。精米所の周りに、人がたくさん集まっていたのが上空から見えたのでしよう。負傷者が出なかったのが、不幸中の幸いです。

大根占の街にも日本兵が駐屯するようになり、「いつかアメリカ軍が

戦後80年を前に

錦江町遺族会が解散

町内に居住する戦没者等の遺族で組織されていた「錦江町遺族会」。令和7年3月31日をもって、「錦江町遺族会」は解散しました。旧錦江町遺族会会長の久保幸雄さんの思いとは――。

錦江町遺族会の令和6年時点での会員数は102名。会員数だけ見ると、組織としては大きいように思えます。

解散理由について、「高齢化。会にも出られないし、組織の維持・運営が難しい」と旧錦江町遺族会会長の久保さんは語ります。「他の市町村は組織を維持しているところが多く、色々なところから『もう少し続けられないか?』と相談もありました。続けたい思いは山々。でも、子どもたちの世代に『じゃあ、後はお願いね』とは簡単に言えない」。

久保さんは、小学4年生のときに父親を戦争で亡くしました。「大根占の港まで出征する父を見送りに行きました。『お母さんの言うことをよく聞けよ』と言いついて戦争へ行つた、あの父の姿を忘れることができない」と久保さんは涙を浮かべます。

田代地区には、昭和31年3月に立

上陸するのでは」と、大人たちは不安だったのだと思います。飛行機の音がすると「防空壕から出るな、隠れる」と、子どもたちに厳しく言っていました。

私の叔母は、出征した息子の武運長久を祈って、毎日、神川から吾平山陵まで歩いてお参りに行っていました。ある時、歩き慣れた道なのに、途中で迷ってしまった。たどり着かないことがあったそうです。「息子が『お母さん、もう来なくていいよ』と知らせしてくれたのかもしれない」と、息子の戦死を予感した叔母。それから間もなくして、戦死の知らせが届いたということでした。

若い男性は戦争に駆り出され、残った女性たちは暮らしていくために必死な毎日。食べ物も着る物もなく、哀れ。戦争を知らない、今の若い人たちは、本当に幸せ。



新田自治会
白井 ミヤ子さん (96歳)

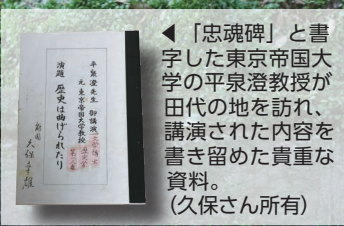


旧錦江町遺族会 会長
久保 幸雄さん (89歳)

てられた忠魂碑があります。小高い丘の上にひっそりと佇む石碑。まるでここだけは時間が止まっているかのような、そんな感覚を覚えます。「戦地へ赴き、散っていった英霊たちのおかげで、今の平和があることを決して忘れてはいけない」と忠魂碑の前で久保さんは手を合わせます。

毎年行われている「戦没者・殉職者合同追悼式」は、今後も錦江町社会福祉協議会が主催し継続していきます。(今年も11月に開催予定)

戦争を知らない世代に託された責務とは――。戦後80年。この節目の年に、「平和」について今一度考えてみませんか?



「忠魂碑」と書かれた東京帝国大学の大平泉教授が、田代の地を訪れ、講演された貴重な資料。(久保さん所有)